

第1回 大正時代とワイルド

大正時代（1912年7月30日～1926年12月25日）の日本にどのようにオスカー・フィンガル・ウィルズ・ワイルド(Oscar Fingal O'Flaherite Wills Wilde, 1854-1900)が受容されたのだろうか。明治時代はまさにワイルド生存中の時代であるが、*De Profundis* (1905)の出版をひとつの契機としてワイルド再評価の大きな波動が日本にも届いている。

大正という新しい時代を迎え、その社会状況の中でワイルドがどのようにとられられたのか、大正文学にどのような影響を与えたのか、まず概略的なことを取り上げておきたい。

(1) 社会状況とワイルド

大正時代に入ると、ワイルド受容は加速度的に高まった。これにはいくつかの原因が考えられる。「新しい女」、「近代劇運動」、「社会主義」、「心理学」といったキーワードが「大正時代とワイルド」の接点になっている。社会状況から見ると、明治44年(1911)9月の『青鞥』創刊を経て、大正2年(1913)には平塚らいてう(1886-1971)はエレン・ケイ(Elen Karolina Sofia Kay, 1849-1926)の『恋愛と結婚』を訳載し、同じ1月に『中央公論』に「新しい女」を発表した。さらに、『青鞥』の1月号には伊藤野枝(1895-1923)の「新しき女の道」、2月号には福田英子(1865-1927)の「婦人問題の解決」が発表される一方、同年2月には青鞥社により「新しい女」講演会も開催された。「新しい女」(「ニュー・ウーマン」)とは、1890年代に家事と育児よりも、社会的自立と自己教育を求めた女性たちで、日本でも平塚らいてうを中心に紹介された考え方である。大正2年(1913)7月には文芸協会が解散し、島村抱月(1871-1918)・松井須磨子(1886-1919)を中心とした芸術座、東儀鉄笛(1869-1925)と土肥春曙(1869-1915)を中心とした無名会、沢田正二郎(1892-1929)を中心にした新国劇などが結成され、12月には日本人により『サロメ』が初めて上演された。ワイルドはサロメ・ブームと文学者への影響という波動の形で登場することになった。松井須磨子の演じるサロメが当時叫ばれていた「新しい女」とのイメージと合わさり、サロメ・ブームが起こったのかもしれない。サロメが「新しい女」というよりは、これを演じていた松井須磨子は新劇の女優として実質的に活躍した当時の日本にはまさに「新しい女」として見えたのかもしれない。大正13年(1924)6月には土方与志(1898-1959)、小山内薫(1881-1928)が日本最初の新劇の劇場、築地小劇場を創設したことも触れておきたい。

ヨーロッパの「ニュー・ウーマン」については、平成10年(1998)6月のタトル/渡辺和子監訳『フェミニズム事典』(明石書店)、平成11年(1999)4月の川本静子『<新しい女たち>の世紀末』(みずぐ書房)、日本の「新しい女」については昭和62年(1987)5月の小林登美枝・米田佐代子編『平塚らいてう評論集』(岩波書店)、平成9年(1997)5月の大越愛子『近代日本のジェンダー』(三一書房)、『青鞥』については復刻版が昭和61年(1986)3月に不二出版より出版されているほか、平成15年(2005)9月の叢書『青鞥の女たち』(不二出版)、昭和62年(1987)10月の小林登美枝編『「青鞥」セレクション「新しい女」の誕生』(人文書院)、平成3年(1991)4月の堀場清子編『「青鞥」女性解放論集』(岩波書店)、平成13年(2001)5月のらいてう研究会編『「青鞥」人物事典100人の群像』(大修館書店)などがよい参考となる。

本間久雄(1886-1981)は大正2年(1913)5月に『遊蕩児』に於いて作者は何を描かんとしたか(『新潮』第18巻第5号)を発表、同年6月には本間久雄による『ドリアン・グレイの肖像』の翻訳『遊蕩児』が発端となり、本間久雄と佐藤春夫(1892-1964)の間で論争が起きた。同月には佐藤春夫『遊蕩児』の譯者に寄せて少し許りワイルドを論ず(『スバル』第5年第6号)が発表された。佐藤春夫の文壇デビューの契機がこの論争になっている。⁽¹⁾ さらに、佐藤春夫については、ワイルドの『獄中記』の波動のひとつとして『田園の憂鬱』(1918)が取り上げられるなど、ワイルドとの関係が論じら

れるようになることを考えると、興味深い論争と言える。「佐藤春夫とワイルド」については、昭和43年(1968)3月の井村君江「佐藤春夫とオスカー・ワイルド」(成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院)、昭和62年(1987)5月の鏡味國彦「アーサー・シモンズとオスカー・ワイルドの波動—大正期を中心に」(『十九世紀後半の英文学と近代日本』文化書房博文社)、平成9年(1997)10月の井村君江「佐藤春夫」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店)がよい参考となる。

大正3年(1914)から大正7年(1917)までの第1次世界大戦の好況による経済の発展と護憲運動を中心とした大正デモクラシーの展開は、ひとつの安定した社会・経済状況を作り出し、芸術・学問など文化活動を活発にした。資本主義の発展と大正デモクラシーを背景に、中間階層の人々は生活の向上のために教養や教育に目を向けるようになり、その結果あらたな価値観が生まれたのである。海を越えたロシアでは大正6年(1917)にロシア革命が起き、日本国内では大正7年(1918)7月23日には富山県魚津町から米騒動が起こり、全国へ波及した。明治43年(1910)5月大逆事件のあと、大杉栄(1887-1981)は大正元年(1912)10月には荒畑寒村(1887-1981)と共に『近代思想』を発刊するなどの動きもあったが、時代を反映してか、大正8年(1919)2月に『我等』、4月に『改造』、6月に『解放』が相次いで創刊された。特に『解放』は社会主義的傾向の強い雑誌である。明治24年(1891)5月に「美術の個人主義」として紹介された『The Soul of Man Under Socialism』は、その後明治時代には翻訳は登場しなかったが、大正3年(1914)2月に荒畑寒村「ワイルドの哲学」(『近代思想』第2巻第5号)で「個人主義は、吾々が社会主義を通じて到達せんとするものである」⁽²⁾と紹介され、5月には新田佐逸「ワイルドの *The Soul of Man* にあらわれたる思想」(『新潮』第20巻第5号)、6月に近衛文麿「社会主義論」(『新思潮』第1巻第5号)としてようやく翻訳が果たされたのである。

(2) 大正文学とワイルド

元号によって文学の史的発展を区分することに意味があるのかといった考え方もあろう。元号とその時代の文学とが密着する特殊性があれば、そこには大きな意味が生じることになる。成瀬正勝は「大正初期文壇と西洋文学」の中で次のように述べている。

大正期の発足をたとえば大逆事件の勃発というような、既成の権威への強烈な挑戦がなされ、いわば明治的秩序の破綻を生じた時期に置く点では他者と異ならないけれども、その挑戦や破綻自体は、大正期の属性であるよりは、むしろ明治期のそれであって、明治期の近代化の終焉を意味しているとする見方に注意を喚起したいからである。このことは、いわゆる大正デモクラシーが、秋水的な明治社会主義の路線とつながっていないことでも明らかであろう。そして大正文学もまた、明治自然主義とは異なる基盤から発生するのである。⁽³⁾

大正文学は単に明治文学の継続ではない。明治と比べると大正は政治的には大きな変革はなかった。時間的には15年と短い中で資本主義刑財の発達、市民意識の台頭があり、大正デモクラシーという新しい展開を迎えたことは大きな特徴があろう。

石崎等(b.1941)は「ワイルドと大正文学」の中で次のように述べている。

大正文学においてワイルド芸術が果たした役割は計り知れない。1つは松井須磨子によって演じられたサロメの妖しげな魅惑であり、もう1つは日露戦争後に青春を迎えた青年たちが『ドリアン・グレイの肖像』の主人公にかぶれたことであろう。そうした受容の全体は、ポスト自然主義における唯美主義的な文学の隆盛と連動している。⁽⁴⁾

ワイルドの作品が「文化表現」として文学者を刺激し、創作の発想源に、また影響を与えたことは多く指摘されている。例えば、佐藤春夫(1892-1964)、泉鏡花(1873-1939)、谷崎潤一郎(1886-1965)、吉田絃一郎(1886-1956)、芥川龍之介(1892-1927)、金子光晴(1895-1975)、有島武郎(1878-1923)などが挙げられる。また、ワイルドの周辺人物も同じように紹介された。アーサー・シモンズ(Arthur Symons, 1865-1945)の *The Symbolist Movement in Literature* (1900)は大正2年(1913)10月には岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』(新潮社)として出版され、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)は本間久雄が積極的に紹介した。モリスは「生活の芸術化」や「社会主義」とも大いに関係しており、大正時代の日本の社会状況に受け入れるのに丁度よい思想の持ち主であったと言えるかもしれない。大正時代は単に外国文学を移入・受容するだけでなく、社会を意識した文学観が台頭して来た時代であった。大正9年(1920)11月の生田長弘・本間久雄『社会改造の八大思想家』(東京堂書店)ではマルクス(Karl Heinrich Marx, 1818-1883)、クロポトキン(Protv Aljeksjejevich Kropotkin, 1842-1921)、カアペンター(Edward Carpenter, 1844-1929)、イブセン(Henrik Johan Ibsen, 1828-1906)、ラッセル(Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970)、トルストイ(Leo Tolstoy, 1828-1910)、モリス、ケイが扱われており、当時の関心の一端が伺える。

まとめ

大正時代とワイルドを考えると、特にワイルド劇上演、翻訳によるワイルド全集の出版は大きな意味を持つ。戯曲は、上演されて初めて芸術としてひとつの形を全うするのである。『サロメ』の上演が大正時代に多く行われたことは劇作家としてのワイルドが注目を浴びたことになる。

ワイルドが大正文学に与えた影響については、昭和43年(1968)3月の成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』(明治書院)、昭和62年(1987)5月の鏡味國彦『十九世紀後半の英文学と近代日本』(文化書房博文社)がよい参考となる。

参考資料

柳田泉他編『座談会大正文学史』岩波書店、1965年4月

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、武蔵野短期大学、2001年6月)

「早稲田大学ラッセル関係資料コーナー」(<http://www005.upp.so-net.ne.jp/russell/RCAT-31HTM>)

注

- (1) 谷沢永一「『遊蕩児』翻訳論争 佐藤春夫——本間久雄」(長谷川泉編『近代文学論争事典』至文堂、1962年12月)を参照。
- (2) 荒畑寒村「ワイルドの哲学」(『近代思想』第2巻第5号、1914年2月)、p.1.
- (3) 成瀬正勝「大正初期文壇と西洋文学」(成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院、1968年3月)、p.5.
- (4) 石崎等「ワイルドと大正文学」(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.502.